
真剣で僕は恋できない？

次元賄賂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で僕は恋できない？

【Nコード】

N4248BA

【作者名】

次元賄賂

【あらすじ】

マジ恋のやりすぎで過労死した転生オリ主こと藤堂邦弘、そんな彼がマジ恋世界で送るありきたりな物語

プロローグ

転生、それは二次創作において語るまでもないもの。

テンプレ系転生オリ主、アニメや漫画、ゲームの世界に転生して、神なる超越存在からチート能力やハイスペックな身体能力や頭脳をもらい、転生者最大のアドバンテージである原作知識、前述のチート能力を使って無双し、原作キャラと仲良くなり、あわよくば結ばれ第二の人生を幸せに送る。

こんな妄想をした人は何人いるんだろうか？
いや、僕もその中の一人か。

これは2009年8月28日に発売された『真剣で私に恋しなさい！』というAVGを早朝から店に並び購入して、夏休みが終わる8月31日に全ルートを2週目したところで過労死した僕が何の巡り合わせ、何の星巡りかは知らんが、このゲームの世界に転生し、トコトン突き進む話だ。

用意はいいか？

踏み出す勇氣は持ったか？

勇往邁進の精神は忘れてないか？

この気構えを持ってないと、とてもあの世界は渡れないぜ。
なんだって、アイツらは一筋縄じゃいかねえからな。

プロローグ（後書き）

年末からお正月にかけて、実家にいたのですが…。

自分の部屋を掃除したら、奥から出てきたノートにプロット状態のマジ恋とリリカルなのはSSを見つけてしまい、どうしたもんかなーと悩んだ挙句、投稿することに決定しました。

第一話 物・語・開・始

よっ！オレ、サト、じゃなかった。ゴメンナサイ。

こんにちは僕、藤堂^{とうどう} 邦弘^{くにひろ}っていいいます。転生者です。

マジ恋のゲームやってて過労死して、なんの因果か知りませんが、このマジ恋の世界にめでたく？転生しました！

赤ん坊から転生することができたんだから、やることは一つ、幼少期の風間ファミリーに介入することを誰もがやろうとするんじゃないんでしょうか？

そんなことは僕にはありえませんでした。

なぜかって？そんなの決まってるじゃないですか！

生まれは川神でも、育ちは松笠と七浜なんですよ！

なに、この生殺しみみたいな環境？椎名京のフラグ立てられないじゃん！

まあ、僕の邪な欲望は置いといて。

どうやら僕の生まれた家は、どうも武士の家系らしいんですよ。藤堂って滋賀県じゃなかったっけ？

そのため僕は武術を修めることになるんですよ、体動かすの嫌だったんですけど。前世がモヤシッ子だっただけに。

でも、両親と姉はやめさせてくれない。僕には武道の才能と素質があるとかいって、修業ばかりさせられました。四歳から中学校卒業までミツチリとね。

さて、僕が住んでいた所は松笠です。当然目をつけられましたよ、竜鳴館の橘平蔵に。武道四天王の鉄乙女ともどもに鍛えられ、しごかれましたよ。

七浜では久遠寺家の大佐から上杉鍊の練習相手みたいなことやったりと、九鬼揚羽と死合したりと成長イベントには事欠かなかったです。

ここまで来ると僕は川神百代とガチでタメ張るぐらいの実力がついてしまいました。いや、ついてしまったかな。

どうすんの、コレ？

僕自身、武道の修業させるって聞いたときはそれなりに強くなればいいなーって、少なからず思ってたんですけど。

まさかここまで、才能と素質があるって聞いていましたけど、チートレベルだなんて誰が予想したでしょう？

勉強はどうしてたかって？ 簡単ですよ、前世の知識と効率のいい勉強方法のおかげですぐに成績はトップです。一番です。

あまりの文武両道さに周囲の大人たちは？松笠の麒麟児”だの？七浜の武神”とかいってます。言われて悪くないなー、って思ったことは内緒ですよ？

さてと、自己紹介みたいなのはここまでにして。

現在、僕は川神学園の一年生。

あつ、黛由紀江こと、まゆっちはいませんよ。

直江大和と愉快的仲間たちと同じ年に入学しましたから。

入学早々、川神百代に目をつけられて勝負を挑まれるかなーって、思ってたんですけどね。別にそんなことはありませんでした。

だってあちらさんは気付いてないんですよ、僕のこと。そりゃ、彼女の祖父である川神鉄心にしかるべき時が来るまで黙っていてほしいと頼みましたけど。入学して1ヵ月もたてば不思議に思います。

ふうー、そろそろ現実逃避はやめようかな。

「ねえ！ アタシと勝負しなさいよ！」

目の前にいるこの娘をどうにかしよう…。

原作メインヒロインの一人、川神一子

まーだ、原作は始まっていないぜ。

物語は始まったけどな。

大丈夫だよ。予想外な事が起きまくってるだけだから。

第二話 犬・娘・必・敗（前書き）

携帯からの投稿になりますので文脈がおかしかったりします。

すぐに修正をいれますが、いまはこれでお願い致します。

スマートフォンってやりにくい。

（修正しました）

第二話 犬・娘・必・敗

「えーと、川神一子さんだっけ。どうして僕と勝負をしたいのかな？」

「そんなの決まってるわ！あんたが強いからよ！」

「だからどこで僕が強いってことを聞いたの？」

ダメだ。やっぱりメインヒロインは手に余る。

おい、直江大和、そして椎名京。見てないで何か言ってください。

「おじいちゃんが電話で言ってたわ。お姉さまとあんたが死合することを決めたって」

おいしい！あのジジイ！！なにが確かに秘密にしておこうだよ！しっかり聞かれてるじゃないか！

クソっ！入学して一ヶ月たってないのに原作キャラからこんなに早くコンタクトがあるとは予想外だ！

「つまりなんだ？川神百代と戦う＝強い。だから決闘しろと？」

「その通りよ！」

スパーンと僕の机にワッペンを叩きつけてくれた。
やめろ、クラス中が見ている。

「さあ、どうするの？ 決闘するの？ しないの？」

正直言っ僕が彼女と戦う意味ってないんだよな。

僕の一方殺が決まっちゃうから。

でもこれ以上原作から離れるても仕方ないし、受けますかね。フ
ラグ立てのために。

僕は上着のポケットからワッペンを取りだし、静かに重ねた。

「その決闘受けよう。これで受理されるはずですよ、学園長？」

「うむ。その決闘、許可しよう」

「じいちゃん！ いつの間にいたの？」

どのタイミングで教室に入ったんだよ。全然気付けませんでした
よ。

「ホッホッホッ。いやあなに、たまたま教室の前を通りかかった
ら威勢のいい声が聞こえての」

本当にたまたまかあ？ このエロジジイ、なんだかんだ言っ孫に
や甘いからな。

「藤堂もすまんのう。百代との死合を予定してるにも関わらず、
一子の受けてくれてな」

バレたからって開き直るな！

「別に構いませんよ」

川神百代との死合を申し込んだのは僕じゃない。川神鉄心、このジジイが入学したときに、相手として頼み込んできたのだ。川神百代の戦闘への衝動を和らげるための最終手段としてね。あくまで予定なのは今の僕自身が全力で闘える状態じゃないからだよ。

「まさか姉と戦うのではなく、妹が先に戦うことになるのはのう」

「まったくどうしたのですかね」

ホントにこの犬、余計なことかしらない。

「では、なるべく今日中に出来るようにしておくからの」

「お願いするわ!」

「よろしく頼みます」

その後、昼休みの放送で決闘は放課後に行われることが決定した。

side直江大和

「ワン子、藤堂の情報、調べてみたぞ」

「あつ、大和。どうだった?」

昼休み、俺、京、モロ、ガクト、ワン子で集まり、俺が人脈で手に入れた藤堂の情報を元に対策会議が開催されていた。

今日はキャンプはいない。また何処かでメシでも食ってるんだろう。

「まず確実に言えるのは、藤堂はそれなりに強い。昔は松笠と七浜に居たらしいんだけどな、そのときに川神院帰りの武道家を何人も倒しているらしい」

松笠と七浜に住んでいる人の情報だし、実際に戦っているところを見たって言ってるヤツもいるから確定情報だろう。

「川神院帰りってことは、モモ先輩と学長にまけたヤツらの後始末みたいなことをしてたってわけか？」

ガクトが身を乗り出して言う。後始末って言い方は違うんじゃないか。

「後始末じゃなくて、負けて帰るわけにいかないから、せめてランクの低い相手に勝とうとして、挑んだってことが正しくない？ガクト」

モロがすかさずフォローをいれる。それに対し、ワン子は。

「川神院に挑んでくる武道家に勝てるぐらいには強いってことね！俄然燃えてくるわ！！」

ご覧の通り、ヒートアップしっぱなしだ。

「で、大和。他に情報はないの？使う武器とか、弱点とか」

「弱点は特に聞いていない。でも武器に関しては日本刀使ったり、大剣使ったり、狩猟笛とか、盾だけで戦って勝ったっていう武勇伝がいっぱいあるからよくわからん」

「多数の武器を使うってことかしら？」

「違うよ、多分剣道とかやってると思うから日本刀を使ってくるはず」

「はあ？ どうしてそう言い切れるんだよ」

「上手く隠しててわからなかったけど、ワッペンを取り出すときに見えたの。竹刀ダコ」

「「「あっ！」「」」」

剣道や弓道、スポーツでもそうだ。バットを振っていると、手のひらの特有の部分がマメになり、潰れタコになる。

京はそれを見たのだろう。

「ナイスだわ、京！これで使う武器はわかったわ。刀を使ってくるのなら、薙刀を使うアタシが有利だわ！」

「ていうか、よく見えたね。そんな細かいところ」

「弓使いは目が命。大和、私役に立ったでしょう？ だから付き合っ
って」

「お友だちで」

うん、いつも秘密基地でよくある光景だ。

だが、気がかりなのは学長と藤堂の会話だ。

あの内容だと、ワン子はもの凄く下に見られてる気がする。学長はいいとして、藤堂はそんなことを言える立場なんだろうか。

「ワン子」

「なーに？ 大和」

「負けるなよ、いつものペースでいけば勝てるさ」

「当然よっ！」

side 藤堂邦弘

時間がたつのもって早いね。もう放課後ですよ、決闘の時間ですよ。第一グラウンドには結構人が集まってまして。

「決闘トトカルチョやってるよ！！」

「ポップコーンいかがですか！」

原作にもあったけど、ここまで商魂逞しいと感動してしまうな。

さうて、対戦相手の川神一子さんは、風間ファミリー（ただし風間翔一はいない、どこいったんだろうね）の面々に励まされてますね。

でも一番気になるのは、直江大和の後頭部に大きなオツパイを押し付け、のしかかっている川神百代さんなんですよ。

ちくせう、羨ましいです。

僕だってあのオツパイ揉みたいです。

敢えて言おう！ 直江大和モゲロ！！！！

これで文句言うお前は、贅沢だ！ 贅沢は敵だ！

「両者、前へ！」

おっと、そろそろ始まりますね。

教室にあった、この模造刀よくできていますね。

「では双方、準備はいいな？」

「ええっ！！」

「ああ」

「では、始め！！」

「せりゃああ！！」

開始の合図とともに、一子さんは気合いを放ちながら薙刀を上段に構え振り下ろす。

それを僕は刀の鏑で防ぐ。正直ハエが止まって見えるスピードだ、

振り方は形にはなってるけど、中身が伴ってないから軽い一太刀だ。

「なんの！」

僕がかわさないことを良いことに次から次へと刀の間合いに入らないように斬撃をくりだし、それを刀で防ぎ続ける僕。

始まってから一步も動いていないのに気付かないのかな？

「山崩し！」

おっと！足への攻撃はやめてよ。せっかくの縛りプレイなのに。

「守りが固い！」

「そうじゃなくて、君が未熟なだけだよ。そんな攻撃じゃ僕を動かすことなんてできないよ」

一子さん、君は本当に話にならないよ。

君より、さっきからまともに戦えと敵意を飛ばしてくる川神百代とやるほうが有意義だ。

そういえば百代先輩、僕に興味無さそうにしてたところみると、死合いのことは知らないっぽい。

もういいや、飽きた。終わらせよう。

薙刀を回転させて力を溜めているところに僕は刀を抜き、斬撃を飛ばした。

「蒼波！」

「きゃう！」

さすがに防御態勢とってないとぶっ飛ぶね。

手加減は当然したけど、しばらくは動けないだろうな。本式で打ったら上半身と下半身がお別れしちゃう。想像したくない、したくない。

「そこまで！勝者、藤堂邦弘！」

ギャラリィは好き勝手に騒ぎ、愉快的仲間達は敗者を慰めに。そして僕は更なるメンドウがあらわれる。

「おい、勝負しろよ」

どうせなら、姉妹井で来てくださいよ。

川神百代先輩。

で。これ結局、旗たったの？
違う旗なら立った。

第三話 事・前・交・渉（前書き）

また携帯から投稿。

（修正しました）

第三話 事・前・交・渉

「ほお、妹とは勝負できても姉である私とは闘えないと言うのかお前は？」

「だから場所をわきまえてくださいってば！」

川神一子との決闘後。ずくつとこの調子ですよ、この戦闘狂。

あ、一子さんなら保健室に行きましたよ。川神院師範代のルー・リーにかかれ、風間ファミリーもおまけで。

直江大和がチラチラと僕のことを見てくるのを感じましたけど、そう簡単に僕の本質を見抜かれてたまりますか！ ただでさえ感情の機微に鋭い主人公だし、油断できません。

それにくらべ僕はこの物語におけるイレギュラー。どんな化学反応を起こすかわかりません。接触を図るタイミングが肝心ですよ。

要はアイツがどのヒロインと、くつつくかが問題。とつとと京とヤッチまえ！

まゆっちは渡さん！！

「モモ、落ち着かんか！」

「止めるな！ ジジイ！ 私はコイツと闘いたいんだ！」

バゴン！ と脳天に拳を振り下ろされ、百代さんは無茶苦茶痛そうに頭を抱えています、ざまあみろですよ。

いくら僕でも武神といわれたこのジジイの拳骨を貰いたくありません。

せん。平時で人を殺せるぐらいの威力がありますから。コイツら位になると。

それを耐えることができる僕もイカれてますけど。

「いたいけな美少女に何するんだ！ ジジイ！」

仕返しと言わんばかりに右ストレートを繰りだし。

「お前なぞヒョッコで十分じゃ！」

パンチを捌き、カウンターを放つ。

そのまま軽い？ 乱闘に連れ混む二人、お前ら仲いいだろ。

飛んでくる衝撃波をかわしながら、このまま放置し帰宅することを決定です。

コイツらの家庭内の事情に付き合ってられますか！

「あっ！ 藤堂クン！ この二人を押さえるのを手伝ってください！
イ！」

「ヤーですよ！ 僕が入るとずうええったい！ 二次災害が起きますもん！ それよりルー師範代、川神一子さんの容態は？」

「さすがは藤堂クンだよ。怪我らしい怪我はないし、骨にも異常はないヨ！」

「そうですか。んじゃ、サイナラ！」

「あつ！　ちょ、チョット！」

side 直江大和

藤堂がワン子に放った技は『蒼波刃』というらしい。

ルー先生曰く、本来なら居合の型から斬撃を放ち、遠く離れた相手を斬るという剣士にとって高等技術らしいがアイツはそれを打撃として、つまりは切断でなく打撲になるように放ち、体が痺れて動けなくなるオマケまでつけた。

「でもワン子が無事でよかったよ」

「うん、モモ先輩とまともに闘えるぐらいに強いってことが分かったんだし、これ以上関わらなくてもいいんじゃない？」

モロの言う通りだ。でもキャップがこのことを聞いたなら何を言うのか分からないんだよな。

キャップとの付き合いは長いけど、何をするのか予想がつかないからな。

今、ここに居ないのもテレビでお好み焼きが旨そうだから広島行ってくるって。自由な男だ。

「ワン子、もう動けるのか？」

「うん、さっきまでピクリとも動かなかったんだけど、元のように動けるわ！」

ベッドから飛び下り、シャドーボクシングで自分は大丈夫だと言わんばかりにアピールする。

もう動けるらい、決闘が終わってから手足が動かないとベソを欠いていたのに。

「それにしても俺、思ったんだけどよ。なんでアイツは自分が最強って名乗りでないんだ？ あれだけ強いんだったら、モテてもおかしくないのに、勿体ないぜ！」

「しょーもない」

「そういうこと言うのガクトだけだから！」

「確かに藤堂は顔もいいし、生活態度も悪くない。でもだからってモテる訳じゃないぞ」

でも、何処かで引っ掛かるんだよな。

何が引っ掛かるって、まるで俺たちのすることをわかってるような顔だ。

あの全てを見据えたような瞳は。

あまり接触したくないと考えてたけど、本格的に調べてみるか。

side 藤堂邦弘

朝早く起きるのって、すんごく面倒くさいですね。

でも日々の鍛練はここから始まります。

早朝5時に起き、30分たっぷり体の関節を暖めるために柔軟体操をします。

そうやって目が覚めたらダンスからトレーナーを出して装備します。

さてランニング(60km/h)です。走りますよー！　いくぜ！　クリア・マインドウォォー！！

今日は気分的に多馬川辺りを走りたいのでそちらに行きたいと思っています。

で、捕まりました。川神百代に。

「なあんだ。お前もここを走ってるのか、奇遇だな」

素直にいつものルート、七浜まで走ればよかった。僕の馬鹿、この人の行動範囲なんて知れてるじゃないか。

「ほ、本当に奇遇ですね」

「ああ、本当にな」

ヤバイですよ！

今、僕の背後から腕を首に回してしなだれかかっている状態なんですけど、ドンドン闘気が膨れ上がっているのをビンビン感じます！！

おっぱいの感触なんてとても楽しめません！

朝っぱらから、爆発オチ（いろんな意味で）になりそうです！

「ジジィから全部聞いたぞ。お前、秘密にしてまで私と闘うのが嫌なのか？」

「いえ、別にそういう訳ではなくてですね。なんといいますか、死合いする機会がなかなかこないといえますか」

「今でもいーだろ！」

ダメです、全然話を聞いてくれません。
この戦闘欲求、かなり深いようです。

「わかりました、明日の昼休みか放課後にやれるか聞いてみましょう」

「おっ！ やってくれるのか?!」

「ただし、必殺技抜きです!!」

「ちえー、でもやらないよりましか」

ようやく納得してくれました。意外です、こんなに簡単に折れるなんて。安いキャラですね、メインヒロインの割に。

「それでは先輩、僕は帰ってご飯を食べたいのでその手を離してくださいませんか？」

「私はなー、お腹が空いてるんだ」

「まだ食べてないんですか？」

「昨日、ジジイとバトったときに校門半壊させたからな、一週間飯抜きにされた。お前があのととき闘ってくれないからだ。男なら美少女にメシぐらい奢れ」

「は？」

「あと、昼飯代に金も貸せ」

もうヤダ、このわがまま娘！！

なかなかの策士

これも計算か

余計な策士は要らない

第四話 序・戦・前・日（前書き）

投稿してから三日でユニークが1500超えるとは思いませんでした。

お気に入り、ポイントを入れてくださった方もありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第四話 序・戦・前・日

「食った、食った♪ なかなか旨かったぞ」

全滅した、僕の冷蔵庫の中身。大事にとっておいたハーゲンDまでデザートとして徴収された。

だけど僕は逆らえない女帝に税金を払い続ける非力な一般ピーポ川神良代になったのだから。

直江大和、僕は間違っていた。今だからこそ理解できる、この理不尽さを。改めて君に同情しよう。

「いやゝ、ホントに悪いな。これから1週間、三食メシをタダでもらうなんてホントに悪いな」

いいからとつと出てけ！

「ちゃんとその弁当箱返してくださいよ、無かったら明日の分も作れませんから」

「わーかってる、ちゃんと今日の晩飯には返す」

お昼のお弁当、原作じゃ川神院の食事係に作ってもらったお弁当を早弁していたけど、それも止められてしまい。代わりに僕が早弁用、昼食用、一子と食べる用、布教用、そして僕の分。全部で5食分作らされることになった。布教用ってなにさ？

「あっ！ 今日の晩飯はトンカツがいいなゝ。明日は全力で戦え

ないといえ、正式な死合い。ゲン担ぎは大事だしな。というわけで、よろしく頼むぞ」

もう……、泣いてもいいよね？

「おい、とつとと準備しろ！」

「……？」

「わかんない奴だな。一緒に登校するんだよ！ 私の仲間を紹介したいからな」

何……だと……！

side 直江大和

藤堂邦弘

武家の末裔である藤堂家の長男として生まれる。生まれてすぐ川神市から松笠に引っ越す。

松笠で武道の才能、素質を高名な人物にみとめられ、その弟子、二人から直々に武術の英才教育を受け、幼いながらも非凡さをいかなく発揮し、麒麟児とまでいわれる。

七浜に進出し、強敵との戦いで鍛錬ばかりで足りなかった戦闘経験が補われ、知る人ぞ知る最強の武人として名を果たす。なんか微妙なフリーズだな。

現在、本人の希望により川神市に戻り川神学園を受験し、首席入学

成績はいつも1位をキープ、だが模試になると50位以内にまで下がってしまい、このことについては学校の勉強はできるが自分のための勉強は苦手とのことらしい。

そのため特進クラスであるS組に入らずA組に甘んじる。

昨日と今日まで集めた情報を合わせるとこんなものか。これだけよく集まったと思う。

武術関連に関してのコネをもってそうだし、知り合いになっても悪くないかもしれない。

そして何よりも、案外イイやつだ。

見ず知らずの俺たちにも弁当を作ってくれるなんて。

「グマグマ、このかぼちゃの煮物、グマグマ…、しっかり野菜の甘みを引き出しておいしい！」

朝にいつもの7人で登校（キャップは昨日のうちに帰ってきた）、そこに姉さんがアイツを簀巻きにし引きずって現れた時には驚いた。もう片手に弁当箱が5つも入った紙袋を持って。

そのとき、モロと京はいい顔をしなかったが引きずられながら話してるうちに打ち解けていた。モロとはゲームと漫画の話で、京とは歴史小説の話で。あのファミリー以外とのコミュニケーションを嫌う京と会話できるヤツなんて初めて見た。キャップもマジで驚いてたし。

「別にそこまで僕に社交性があつたわけじゃないよ」

「そうなのか？ 俺には気軽に何年も前からの知り合いのように見えたが」

「うん、私も別にどうでもいいって思ったんだけど、話しかけられてるうちに気づいたら喋ってた」

おそらく藤堂はこういう人柄なのかもしれない。誰とでもすぐに馴染むことができる。引きこもりとかのカウンセラーとか似合うな。

「それより直江君、食べなくていいの？」

「おい、ワン子！ そのハンバーグ俺んだぞ！」

「フーン！ 肉類はすべてアタシのものよ！」

「この金平ごぼう、美味しいけど辛さが足りない…」

「キャップとワン子はともかく京まで！ これ以上食われてたまるか！」

藤堂邦弘、想像以上に面白い奴だ。

side 藤堂邦弘

心臓が縮んだ。

いや、ホントどうなるかと思いましたよ！

京の警戒心を解くの！ 原作知識と今まで培ってきた話術とか総動員してやっと打ち解けることができましたからね。風間ファミリ―に介入しそこなったとわかったとき、もしものフラグ立てのため念入りに準備しておいて正解でした。

昼休みに弁当のお礼と感想をその場で言うため風間、直江、椎名、一子と4人で来るなんて律儀ですね、僕の分を食いやがって！ おかげでお昼は購買のパンですよ！ 百代先輩は布教用を女の子たちと食べるらしいです、島津と師岡今日は学食っぽいですね。

川神百代めえー！ しっかり僕の分まで紙袋に入れて確保しやがって！ それを直江大和に

「こいつが昼休み、いつも購買だって聞いて憐れんで作ってくれたぞ。味は私が保証する、ありがたく食えよ！」

とかいって一子と食べる分も風間翔一にも渡しやがって！

一子との決闘のことを聞き、今回の弁当も相まって懷かれました。

「なあなあ、他にどんな料理が作れるんだ？」

「フランス料理とかは無理ですけど、中華料理なら作れますよ」

久遠寺家の朱子さん、イタリア寄りだったしな。中華料理は前世からの持ち込み。

「じゃあさ！ 今度の土日お前ん家行くからさ、そんな時に作ってくれ！」

え？　うち来るの？！

「キャップ、姉さんから藤堂の家もう少して聞きだせそうだ」

その手に持っている携帯はなんだ！

「おう！　なるべく早くな！」

「あと姉さんは1週間は藤堂からご馳走になるから、今日ぐらいは行けるんじゃないか？　ガクトから麗子さんに断っておけば問題なさそうだし」

「んーじゃあ、ゲンさんも呼ぼうぜ！」

「もう誘ったけど、今日ぐらいは静かにさせてくれだって」

直江君、君は一体何なの？

どうしてそんなに手際がこうもいいわけ？

「それじゃあ、今日はコイツの家で晩飯だな！　よーし、放課後。風間ファミリー全員集合だ！」

えええええっ！？！？

放課後、百代先輩を除く風間ファミリーとともに最寄りのスーパーで食材の買い出しです。

百代先輩は学園長に死合いの許可をもらいに行ったらしいです。没になりますように。

「あっ！ 一子さん、今日はトンカツだからステーキは入りませんよ！」

「えー！ アタシ、ブタよりも牛の方がいい！」

「じゃあ、テキカツも作りましょうか」

「やったー！」

なんというか、この子はどんだけ食うんでしょうね。200グラムを7パックも入れやがって。

「なんで俺様が荷物持ちなんだよ！」

「知ってます？ 荷物持ちができる男ってモテること」

ウソではありませんよ、ホントのことでもありませんけど

「ねえ、僕は何かすることないかな？」

「でしたら、家についたら食材の区分けを手伝ってください」

師岡くんはおとなしくていいですね、怒ると怖いけど。

「なあ、藤堂。お前の家って、この道であってるのか？」

「いつも通学にこの道を使っていますが」

「いや、この道って俺たちが住んでる島津寮の方向なんだ」

「同じ道を通って当たり前ですよ。だって僕の家、島津寮の近くですから」

「「「はあっ!??」「」」」

ふう、ようやく家につきました。

「なんだよ！ 俺ん家の近くじゃねえか！」

そうなんですよねー、僕の生家、今住んでる家は風間翔一の家
近所なんですよね。松笠に引っ越さなければ介入がバリバリでき
るんです。もう、どうでもいいですけど。

全部で8人前のトンカツ（一部テキカツ）を作るのは骨が折れそ
うです。

前世で母が言っていましたが大人数の食事を毎日三食作るのは無理
！！ と愚痴っていましたけど。今ならその気持ちがよくわかりま
す。

冷蔵庫に明日、明後日の食材を入れるのを師岡君に手伝ってもら
い、お礼を言い調理開始と行きますか。

風間ファミリーはキッチンにいられても邪魔なので、居間でゲー
ムをしてもらっています。

まずは、サラダですかね。木製のボールにレタス、千切りにした
キャベツを盛り付け、半月切りにしたトマト、クルトンをまぶして
完成。

次はトンカツとテキカツ。一枚ずつに小麦粉を全体にまぶし、溶き卵に着けパン粉をたっぷりコーティング。これを油の中に投入。きつね色ぐらいで引き揚げますか。

ご飯ももう少して炊けますし、呼びに行きましょう。

「で、なんで誰もいないのさ。師岡くん？」

「一応、僕は止めたよ！ でもキャップがつまらねえからこの家探検しようぜって」

あんにやろううう！！ アイツは碌なことしねえ！

ドタン！！

「……………上か」

僕は二階へ上がる階段を駆け上がります。これ以上、家探しされてたまりますかああ！！

物音がしたはずの僕の部屋を開けると、そこには無残に散らかされたエロ本が…。

「僕の…、秘蔵のコレクションが…」

「うわー！ 何よコレ！ 不潔よ！ 不潔！」

「おお、これはなかなか」

「んだよ、面白そうなモンなんにもねーじゃん！」

ダメだ、怒る気力も湧かねえ…。

「と、藤堂！」

「なに？ 直江君？」

「この本を譲ってくれ！」

差し出された本、それは『超ヤドカリ白書』。

僕が交渉カードとして、置いといたほんだ。

「ご飯出来たから、さあっさと下におりろおおおおお……！」

「「「は、はイイイイ……！」」「」」

ん？ 一人足りないぞ！

「おい、直江。椎名さんはどこへいった？ あとその懐に入れた本は置いてけ！」

「京なら書斎を見つけたから、そっちへ行くってさ。つーかこの本、本気で譲ってくれ！」

「…やっぱりその本やるから、椎名さん呼んで来い！」

「本当か！ 恩に着る！」

甘く見てた、風間ファミリーのハッスルさってやつを。もうストレスがマッハだよ。虫唾もダッシュしまくりだよ。別の意味でクリア・マインド行っちゃうよ。

1階に下りてると、いつの間にか百代先輩がすでにトンカツを貪っていた。

「よーっ、私がいなくてもしっかり作っておくとは感心だな!」

「リクエストしたのは先輩ですからね!」

直江大和が椎名京を連れてきたことでイスが足りなくなったので物置にあったレジャー用の折りたたみ椅子、二人で座れるタイプを渡した。

「大和、これは恋人みたいに座れてことだよ」

「藤堂!　なんてことするんだ!」

「それしかないの、我慢してくだっさい!」

さーて、僕も食べるか。

「ワン子、そのテキカツを俺様にくれ!」

「いやよ!　ガクトは肉ばっか食ってないで野菜も食べなさいよ!」

「うん、うめえ!　これなら中華も期待できるぜ!」

「大和お、あーん」

「京カスタムはやめてください！」

「…おいしいのに」

「でもホントおいしいよね。これなら専業主夫でもいけるんじゃないかな」

専業主夫な。今の時代、そんな悠長なことできないけど、それもありかな。

そんなこと考えてたら、百代先輩に絡まれた。

「明日の死合いだが、学校でやるのはまずい。だから川神院でやることになった」

没にならなかったか。

「というわけで明日のリクエストは無しだ。弁当も今日みたいに多くつくらなくてもいい」

「でも朝ごはんは食べに来ると？」

「よくわかってるじゃないか」

だろうと思いました。明日は焼き魚でいいや。

「ふーっ、食った食った。ごっそさん」

「片付けはどうするの？」

「そのままでもいいよ、全部やっつくから」

「んじゃ、ヒマだったら家にも来いよ！」

「いつでも歓迎するぜ！」

「あっ！ そうだ。携帯のアドレス交換できるか？」

直江君が携帯を取り出して、操作する。

僕も携帯を取り出して、赤外線を送る準備をします。

「赤外線でいいですね？」

「ああ、それでいいよ」

交換完了っと。

「また明日な」

「うん、またね」

うん？ また明日？

まあいいでしょう。

今は明日の決闘とこの散らかってしまったキッチンを掃除するところが先です。

素晴らしいですね、転生したご身分にもかかわらず明確な明日を迎えることができるなんて。

疲れた。

明日はもっと疲れるぞ。
相手は世界最強だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4248ba/>

真剣で僕は恋できない？

2012年1月13日16時47分発行